

## 佳作賞受賞者

佳作賞

「鳩の血（ピジョン・ブラッド）」

【白鴉】28号

美月麻希氏

美月麻希（みつぎ・まき）

一九六〇年十一月六日、神戸市生まれ、神戸市在住。

一九八三年三月、徳島大学医学部栄養学科卒業。

農業研究開発職を経て現在アパレル会社にて経理職。

二〇〇四年四月～二〇一五年三月 大阪文学学校在籍。

二〇〇七年～白鴉文学の会所属。

大阪女性芸協会員。

【白鴉（HAKUA）】掲載作。

『テネシーワルツ』『蛇の衣』『揺れるワンピース』『私たちの宴』『芝生に寝ころび空を聴く』『銀色の雫』『鳩の血』

もう一人の親友であるかおるは、理恵の父の愛人であったという過去を持つ。そのため、理恵に対しての複雑な思いを抱え込んでいた。その気持ちがよく理解できない裕子は、かおるに、もうそろそろその気持ちを「消しちゃえ」と忠告する。

一方、裕子は母が持つ特別なルビーヘビジョン・ブラッドに幼い頃からわけもなく惹きつけられてきた。あるとき、母の自宅に押し買いが現れ、ヘビジョン・ブラッドが奪われてしまう。そのことにより、母からヘビジョン・ブラッドが裕子の父から贈られたものであることがわかる。夫、大豪の機転によって宝石は戻った。

そんなとき、理恵の夫である雅之が秘密カジノに行っていたという怪しい事実が判明する。それに伴い、浮気疑惑が生じる。裕子には、依然として雅之への不信感が消えずにあり、理恵に対して冷静に調査を勧めた。だが、その結果が出たころ、理恵、かおると会う約束の場所に理恵が現れなかった。不安を覚えた裕子は、かおるに理恵の自宅へ行き、自分は理恵の母がいる施設へ行くことを決める。

理恵の母を連れだし、自宅へ駆けつけ、理恵が庭で倒れているのを発見する。理恵のまわりにはハイヒールの痕が残っていた。先に来たはずのかおるの足跡だと裕子は考える。生まれてはじめて、裕子は自分以外の人間に助けを求めることを考え、夫の大豪に連絡する。

## 「鳩の血（ピジョン・ブラッド）」

主人公の篠原裕子は四十四歳で、理恵、かおるという小学一年生からの友人がいる。三人とも神戸で生まれ育ち、現在も神戸で暮らしている。母はかつて夜の仕事をしており、父が誰なのかはわからない。ただ、華僑が行く幼稚園に通っていたことから、自分には中国人の血が流れているのではないか、という疑いを持っている。

幼稚園で出会った曹大豪という華僑の夫がいるが、彼との間に性的な関係はない。というのも、裕子には中学生の頃から、悪意や性欲を向けてくる人が近づくこと、背筋に悪寒が走り身動きできなくなるといった特異体質があるからである。なるべく人と関わらず、人の感情に頼着せずに生きるために論理的思考を身につけ、研究者として生きていく。しかし、悪意を持つ人はどこにいるかわからない。自分の身を守るため、また自分の身体のうちから突如吹きだす毒のような感情を放出するために、学生時代からボクシングをしたり、歌をうたったりしてきた。

高校時代に親友理恵の夫である相澤雅之と出会ったときに、裕子の背筋は凍りついた。その原因はわからないが、雅之への疑念は裕子から消えることなく現在にいたるまで残っている。

## 受賞誌

白鴉 28

てくる 17

ignea 5

mon 5

